

セッション 16 : 司会の言葉

原 信 之

国立療養所福岡東病院

「パクリタキセル+カルボプラチン(PCb)とビノレルピン+シスプラチン(CV)費用効果」をテーマに、国立療養所近畿中央病院の河原正明先生が2つの文献(SWOG9509, Italian Lung Cancer Project)を引用して報告した。

近年、高度先端医療や薬価の高い薬剤を使用した診療が行われる機会が増え、患者の医療費負担が大きくなっており、医療費抑制をめざして様々な試みがなされている。理想の医療は、最低の医療費で治療効果が上がることであるが現実には難しいことが多い。今回取り上げた非小細胞肺癌に対する化学療法は、いずれの抗癌剤を組み合わせても治癒に導くことが難しく費用効果を分析することが困難である。今回使用した両化学療法レジメンPCbとCVにおいても、有効率、生存期間、副作用とも両群に差を認めなかった。しかし、医療費はPCb治療群で高く、この原因はパクリタキセルの薬価の高さ、PCbの使い易さ(毒性が低い)による投与回数増加などに起因し、効果を得るまでにかかった費用ということにはなっていない。

現在の肺癌の化学療法は、残念ながら抗生物質による感染症の治療とは異なって治癒というゴールに向けての治療ではないために、費用対効果の面からの分析は難しい。感染症の場合は、薬価が高くても切れ味のよい薬であれば短期間で治療が終わるために、結果的には医療費が少なくなることもある。しかし、肺癌の化学療法では、多くの場合ゴールがないために様々な要因が加わり総医療費に影響する。したがって肺癌化学療法のゴールをどこに置くかを明確にしての医療費の分析をする必要がある。いずれにしても、肺癌の標準的化学療法レジメンを採用する場合、医学的な背景と共に費用効果を考慮していくことは重要なことであろう。